

塩津港遺跡とは

長浜市西浅井町塩津浜にある塩津港遺跡では、発掘調査によって、琵琶湖の水面より低い位置で平安時代から鎌倉時代にかけての港跡と平安時代の神社跡が発見されました。

塩津港は、北陸方面と京都とを結ぶ、水上交通の北の玄関口として栄えました。古代から近世にかけて、近江国(滋賀県)は交通の要衝であり、琵琶湖は物流の大動脈として機能しました。

神社跡からは本殿や拝殿などの社殿跡や鳥居跡が発見されました。神社の境内地を囲む堀跡からは、多数の起請文木札や神像5体などが見つかっています。

起請文木札とは、人と人が約束

をする際に、神仏への誓いを書きあらわした文書です。

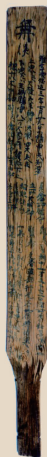
出土した木札は、起請文としては最も古い1137(保延3)年銘があり、「運ぶ荷を盗まない」といった、運送に関する誓いがかかれています。

出土した木札や土器から、この神社は1185(元暦2)年に近江国を襲った地震によって琵琶湖の底に沈んだことが推定されます。このとき、津波と地盤沈下が同時に起こったと考えられ、発掘調査では、琵琶湖からの津波の力によって傾いたと推定される柱材も確認されています。

塩津港遺跡は、琵琶湖とともに暮らした人々の湖上交通の歴史と信仰や祭祀の姿を伝える重要な遺跡です。



写真T-1 神社跡の発掘調査(北から)



写真T-2
保延3年銘起請文木札



写真T-3 男神像



写真T-4 女神像

文化財保護課 園田 万佑香